我々は今何をなすべきか

…大学の[illegible]

9・9における大学管理法は、いったい我々にとって何であったか。それは、我々[illegible]学生に

大衆団交によって勝利したのであろうか。いや、否。それは、[illegible]

たように、前の時期では、多くの学友が[illegible]に激しく[illegible]される

に警察化されたに過ぎない。なぜなら、なんらそこには[illegible]いっさいの

約束を保証し、また我々の力を保証し得るものはなかった。

我々は、ただ立大スローガン十二項目が勝ちとられたばかりでなく、勝利したのではなく、学校が民主的な学校に移るのだという甘い幻想を打ち捨てなければならない。

学友諸君！支配者が行ってきた我々の闘争から[illegible]を一度振り返ってみよう。我々は[illegible]り返されたその攻撃を[illegible]に、この日大闘争の中でも、アメとムチの政策を[illegible]我々の要求の手段で獲得を全て来た事を。現に、次々日[illegible]の大衆団交を破り、約束事の前、[illegible]という事は[illegible]ではないか！これは[illegible]権に[illegible]がつかないまでである。だからである。

そして、この闘争が今この斗争の大きな局面を迎えて、[illegible]による「大学閉鎖」への攻撃[illegible]、[illegible]ものだこれは。一体何を[illegible]にしているのか。[illegible]斗争であるのか[illegible]斗争であるか[illegible]

たろうか。[illegible]

学友諸君！我々は、単なる[illegible]を[illegible]ではなく、[illegible]。なぜなら、この[illegible]が[illegible]。あるいは[illegible]したところで、日本における[illegible]は何も[illegible]ない。[illegible]は[illegible]していない。[illegible]にはなかった。[illegible]で[illegible]しまう。あるいは[illegible]にたけるように。また、我々はその[illegible]

ことを[illegible]ことになるのか。そこで我々には、この斗争を単なる要求斗争にしてはならない。日本における支配の論理、つまり、日大においては、[illegible]が[illegible]するという[illegible]、文部省にみられる反動的な教育、「産学共同」という形が、日大という[illegible]の[illegible]に集約され、それが意識されているという[illegible]を[illegible]しなければならない。[illegible]の日大において[illegible]は、十数年にわたり[illegible]されてきた。

[illegible]化され、すみずみにまで[illegible]は[illegible]していったのである。

大学闘争はいまや[illegible]すべ[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]、この[illegible]

[illegible]の[illegible]は、[illegible]、我々は[illegible]

へおこいがかってくるのである。だから我々は、常に[illegible]
か、いわゆるこういった事態を招きまいで[illegible]
がないのである。まず我々はこういった事態を[illegible]たたら我々は[illegible]
学園をこの五十[illegible]
[illegible]悪行をふりかざしてくる奴らの攻撃に対して我々は戦い、自ら[illegible]を守って
学園を守らなければならないのである。それと共に、それらに対して果敢に対決して行か
なければならない。誰が我々の学園を守り、誰が自治を守ってくれるのであろうか。[illegible]
[illegible]か!? 教授会か!? 断じて、そうじゃない。のは我々である。そこで、自らが主人の立
場で、主体的に斗争に参加することこそ、真の民主化への第一歩である。そして、我
々は、こういう徹底的に討論し、我々の斗争を勝ちとる中で、自らを変革し、自らがこの闘争を
切り開いていこうではないか。

学友諸君！支配者が行って来た我々の弾圧をもう一度思い出して見よう。

全学共斗会議の旗の下に結集した学友諸君！堅い団結をもって自己の内実化と組織実体の強化のみが反体制への原動力となり得るのだ！

日本大学[illegible]

10.11